

「こんなん してます。」

わだいのしごと

70

63人の仕事

最近、自分のむかしの仕事を見直す機会がありました。1998年、10人の仲間たちと一緒に一冊の本を出版しました。『紀の国わたし物語』うみやまさとまちに

され始めた時期でした。まちおこし、地域づくり、という言葉も大きなうねりとなっていました。

『紀の国わたし物語』というタイトルの生きる』というタイトルの本で、和歌山県内で「自分で仕事をつくり暮らす」63人の女性にインタビューしたものです。当時、農村地域で女性を取り組む朝市や食品加工などに対し、農村の女性起業という言葉が政府の文書の中に初めて登場し、男女共同参画社会基本法が制定されるなど、「女性の力」の社会への活用が注目

しかし、地域活性化というけれど、自分は和歌山県のことをどれほど知っているのか？ 観光など表の華やかさとは別の、内実の生の姿を知らないのではないか？ そんな自問がありました。それには、まず、和歌山県の50市町村(当時を訪ね50人に会おう。各地で地に足をつけて働いている人の姿を通して、地域で生きるとはどういうことなのかを知ろう、と思ったのです。こうして和歌山県のまちでむらで漁村でと生きる女性

紀の国わたし物語

『紀の国わたし物語』(夏蜜柑編、1998)



たちをインタビューする仕事が始まったのです。こだわったのは一つ、土地の風土と向かい合い「仕事をつくり出し、生業としていく」と。

「小さな仕事」の強さ

きっかけは本に登場した1人の女性との再会でした。インタビュー当時、彼女は串本町の25歳の女性漁師でした。カツオを追って太平洋を下り、イセエビ、タイ、ブリ漁にと海で生きる様子を話してくれました。「太平洋から昇る朝日に染まった海は感動的、こんなきれいな海の町で大好きな仕

事をするのは幸せ」と。そして、17年後の彼女は、みなべ町の梅農家のお母さんになっていました。南高梅の生産直販で多くのファンとの交流活動に明るく元気に取り組むたくましい農家になっておられたことに感動しました。地に足をつけて暮らす当たり前の生活の実践力に圧倒されたのです。

古座川町のゆず加工の取り組みは、インタビュー当時、年間3000万円を売り上げる農村女性起業の成功事例でした。主婦たちのジャムやポン酢づくりが、その後の地域の高齢化や一

次産業の不振から、地区のほぼ全世帯が出資したむらぐらみの食品加工法人として成長。山村が生き残るため、女性たちの小さな取組みに懸けた住民たちの決意があったのです。最初にジャムづくりを呼びかけた寺本微笑子さんの農園には、和歌山の学生実習でもお世話になります。売上が1億円を超え、次の世代に引き継がれた今も、彼女は80歳を前にした年齢ながら、率先して学生に教示をしてくる農業の現役です。



農産物の6次産業化が政策の支援のもとブームになっています。行政が予算をつものをつくり、工夫し、社会に働き掛け、自分もむらも主体的に生きてきたその姿に学ぶことはとても大きかったです。この本に登場した人と仕事と風土はどう変化しているのか、変わらないものがあるとするればその真実を知りたい、と再調査を考え

け地域資源を活用した事業化を目指しますが、全国市場という競争の場で勝つことが目的ですから、大成功するかもしれないが困難も大きい。そのような祭りに乗らない、乗っても限度のある身の丈の乗り方で、肝心の部分は風土の中で生業をコツコツと積み上げること。それが、時の移ろいの中でも生き抜く「小さな仕事」の強さ、地域で生きることの原点ではないでしょうか。

プロフィール



湯崎 真梨子 (ゆざき・まりこ)
和歌山大学地域創造支援機構 特任教授、地域創造支援マネージャー
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。